つき申し上げました思想の發表の形式に從つて居ることであるのですが、恩物はつまりこうなつて居るでしやう、

一、積木を以て、吾々の觀念を實體的に發表すること、即物を其形の儘に顯はすこと。

二、板を以て、物を平たく上から見た所として平面上に面的に顯はすこと（彩色畫、紙細工の一部も此中に含む。）

三、箸環を以て、物形を、其輪劃だけ即平面上に線的に顯はすこと（線畫糸細工も此中に含む。）

四、キシヤゴ小石等を以て物形を其輪劃だけ即平面上に點的に顯はすこと。

大體恩物はさう云ふ具合に出來て居るのである、恩物を子供に使用さすのには常に此形式に從つて居る。

併しながら私はこれは斷然宜しくないと考へる。吾々の觀念を發表する形式は前程の四でありましやう、されば と申して其材料を嚴密に此四の形式にあてはめて其使用を限つて仕舞ふといふのは甚だ無理ではありませぬか。即板は面的發表の材料であるからと云つてどうしても平面上に并べさせねばならぬ箸も環もキシヤゴも皆其通り排べさせねばならぬ、之を立てたり、立て丶種々積木や何かと一所に交ぜて用ゐるのはいけないと云つて之を非常にやかましく制限すると申すことは甚だ判らぬ次第であります。

（未完）

板と箸

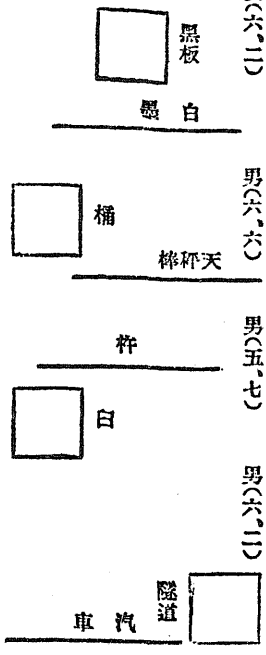
松村ひさ

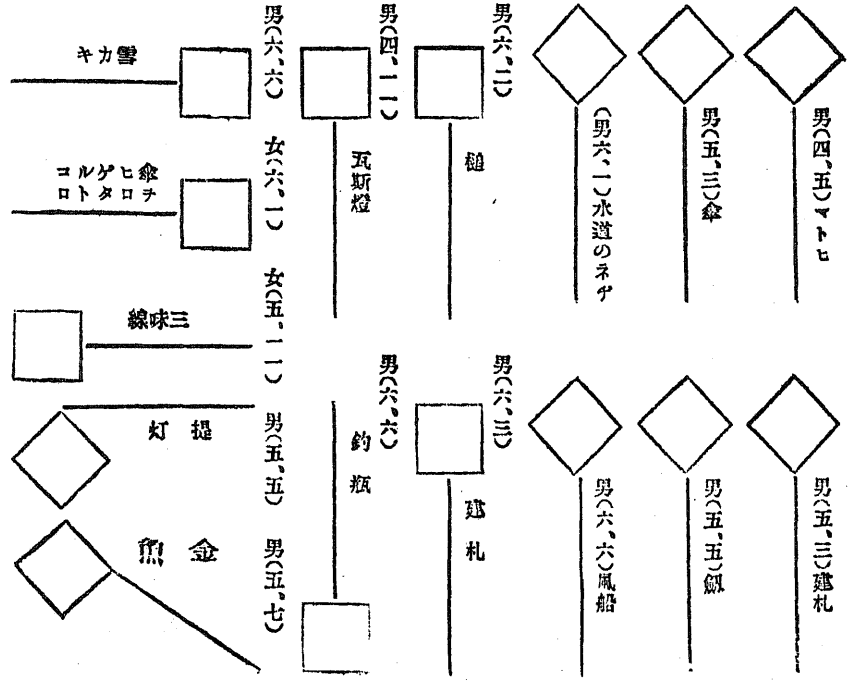
私は、或時、私が世話をして居る幼兒等に、恩物中の正方形の板一枚と、三寸の箸一本とを、與へまして、これでおそべ、といひつけました。そうすると、幼兒

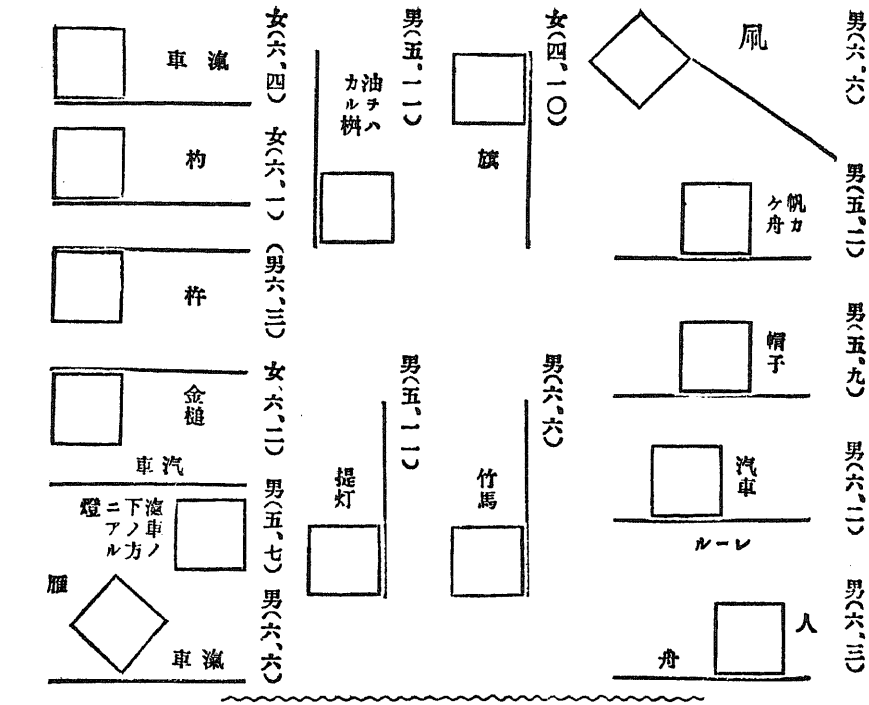
等は、左にあるやうな、いろ〳〵のものをこしらへて、これにさま〳〵の名をつけて、よろこんで居りました、そうして私は、幼兒の考の中には、どういふものがあるか。又或物のどういふところが、深く印象して居るか。又幼兒の想像力は、強いものである。といふことの一端を知りました。

左の圖の中に、男又は女とあるのは、工夫した幼兒の男女別で、數字は、年齢を示して居ります。たとへば六、二とあるは六年二ヶ月であります。

第一板と箸とを排べたるもの







第二板と箸とを立てたるもの

右にある、いろ〳〵のものをこしらへたのは、車夫

とか、職工とか、小商人とか、下等社會の子供であります。

紀州新宮の手毬歌

4/4 | 1 1·2 3 #4 32 | 3 #4 33 2 | 7 6 – 0 1 |
トリデヘンジョインサマ ニ カイカラオ チテ オ

1·2 3 #4 32 | 3 #4 33 2 | 7 6 – 0 1 |
ヨシミ ヅクレ ハ ヨ クレチヨイ トクレー カ

1·2 3 #4 32 | 3 #4 33 2 | 7 6 – 0 1 |
ドノマンナカノ ド ロミヅク レテ コ

1·2 3 #4 32 | 32 72 3 – | 32 72 3·0 ||
レガノ マリヨカ ドロミヅチー ドロミヅチ

取出遍照院様、二階から落ちて、およし、水くれ、はよくれ、ちよいとくれ、かぜのまんなかの泥水くれてこれがのまりよか、泥水を〳〵。

研究漫錄

M H 生

▲子供の觀念界を、知ることは、吾々に取りて、最、必要なことである。吾々には、分り切つた言葉でも、中々、子供には、分らぬことが、多い。不注意な者は、一向、其邊を、無頓着に、唱歌でも、談話でも、やつて居る樣であるが、なるべく兒供に適した、やさしい言語、文句を、使ふ樣に、心掛けねばならぬ。嘗て、三歳から、五歳までの子供二十人に向つて、弟と云ふ言葉を、聞かせた時、子供の心に浮み出た考は、「おとうふ」「おこうこ」等であつた。

▲數量比較の觀念の中でも、重量の觀念の如きは、小學以上の生徒、或は、時によると、吾々にでも、甚、漠然として居る、例令ば、砂糖一斤と云つても、其一斤は、果して、どれほどの重さであるか、實際の觀念